

# 高齢者講習における 「運転行動診断票」の分析結果について

# 「運転行動診断票」の分析結果について

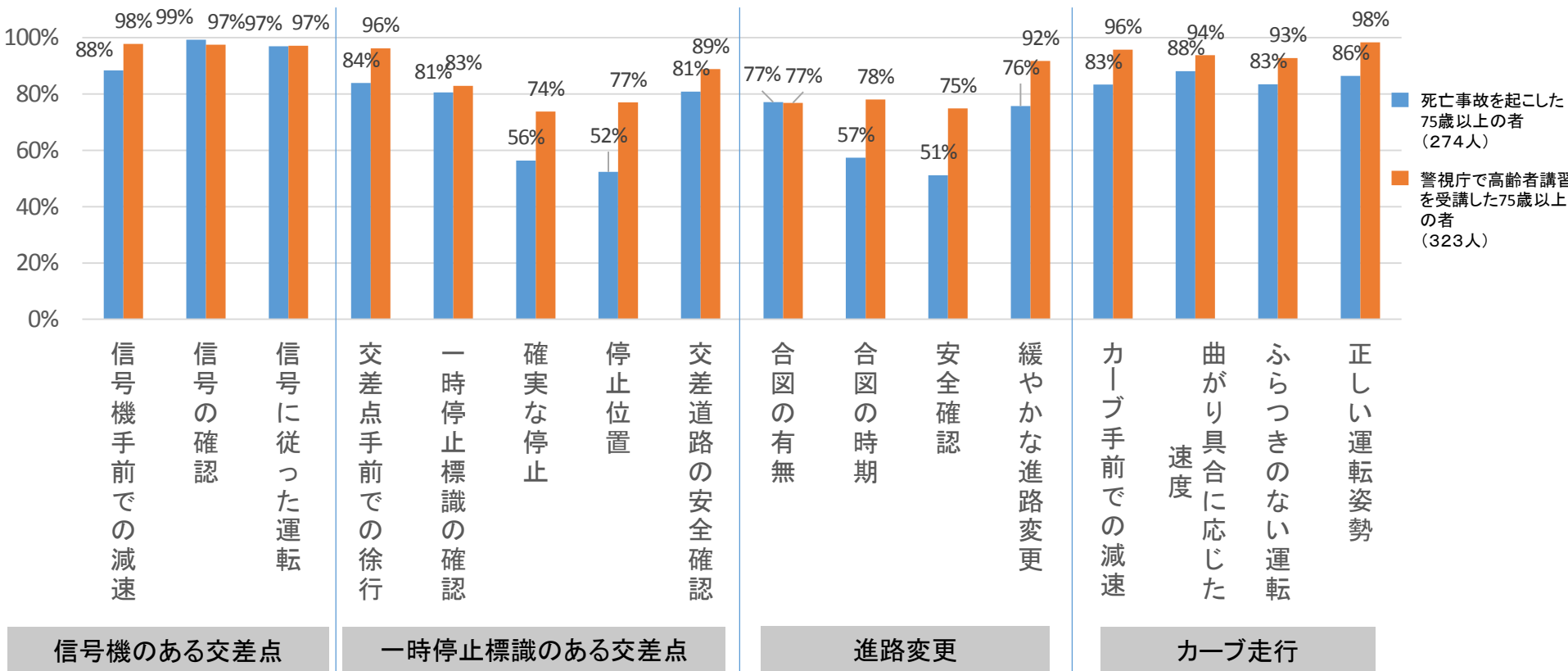
平成29年中に交通事故の第1当事者となった75歳以上の者274人(※1)の直近の高齢者講習における実車指導時に作成された運転行動診断票と、平成29年9月～10月中に警視庁鮫洲運転免許試験場において高齢者講習を受講した75歳以上の者323人(※2)の運転行動診断票を比較。交通事故の第1当事者となった75歳以上の者は全体的に達成率が低く、特に「一時停止標識のある交差点」「確実な停止」「停止位置」「進路変更」「合図の時期」「安全確認」の達成率が低くなっている(※3)。

(※1) 平成29年中に交通事故の第1当事者となった75歳以上の者合計419人のうちの有効回答数

(※2) 平成29年9月～10月中に同所で高齢者講習を受けた75歳以上の者345人のうちの有効回答数

(※3) 平成29年中に交通事故の第1当事者となった者の運転行動診断票の大半は、平成29年に法改正が施行される前の旧様式によるものであったことから、旧様式と現行様式とで共通する課題についてのみ比較を行った。

## 課題項目ごとの1回目の達成率



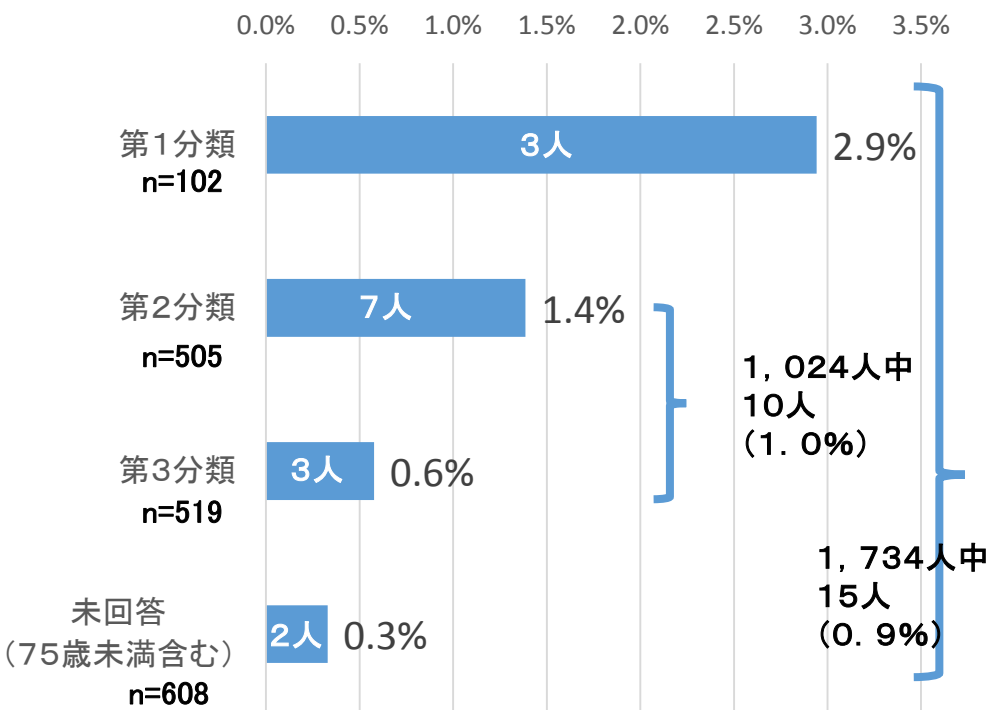
※「二段階停止」は、診断票への記載を確認できない例が多数であったため、比較対象から除外した。

# 「危険性が高く打ち切り」と判断された受講者の割合について

平成29年11月から12月にかけて調査を実施した、高齢者講習受講者1,734名に係る運転行動診断票を更に分析したところ、実車指導を受講した高齢運転者のうち全体で約0.9%が一部の課題について「危険性が高く打ち切り」と判断されている。

特に、認知機能検査の結果別に見ると、「危険性が高く打ち切り」と判断されたのは、第1分類の者のうち約2.9%と割合が高いものの、第2分類又は第3分類の者についても約1.0%を占めていることから、必ずしも危険な運転が行われるのは認知機能に支障がある者に限らないと考えられる。

## 「危険性が高く打ち切り」と判断された割合 n=1,734



## 「危険性が高く打ち切り」と判断された例

○ 第1分類、80歳以上、「見通しの悪い交差点」を打ち切り



見通しの悪い交差点に進入する際に、一時停止の標識を減速せずに通過し、その後も減速しなかったため、危険性が高く打ち切りとなった。

○ 第2分類、80歳以上、「車両感覚走行」を打ち切り



S字走行時にハンドル操作が遅れ、両前輪が脱輪するなど、数度の指導を受けた。改善がみられなかったため、危険性が高く打ち切りとなった。

○ 第3分類、80歳以上、「方向変換」を打ち切り



方向変換時に、何度も前輪が脱輪した。改善がみられなかったため、危険性が高く打ち切りとなった。